

〔そのとき、イエスは〕会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。町中の人々が、戸口に集まった。イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。

—マルコ 1 章—

苦しみが恵みに

ある日、目の不自由なご主人が奥様に引率されて、私を訪ねた帰り際に言い残していった一言が、心に重く残りました。「神父さん、障害は神さまからの恵みでしょうか？」

障害を経験しない私が語れる言葉は持っていませんが、障害がそのまま恵みであるわけではありません。恵みである前に、「十字架」だからです。十字架の貧しさは、それを受容出来ない時、悪としか捉えられないのが世の価値観です。しかし、信仰の力で受容していく人には「十字架称賛の恵み」の世界が開かれていることをイエスは示されました。

先の見えない沈滞した暗闇の世界、カファルナウムに登場したイエスのなされた癒しの出来事は、私たちにその信仰を確かなものにしました。“造られたものはすべて良かった”を信じて禍でさえも神から戴いたものと受容するキリスト者は、「主よこの現実を感謝します。この現実のゆえにあなたを賛美します」と祈れ、禍が恵みに変わるという信仰です。

なぜそんなことが祈れるのか？



良いものとして人間を造られた全能の神が人を創造した目的は、最終的に人を幸せにするためです。その神さまが私たちの「貧しさ」を癒さないで手を置いておられるなら、それは何か他に意味があるからと捉えます。その意味は、あなたがあなたのために用意された幸せにたどり着く前に、この体験をして欲しいと神があなたに望まれたからなのです。それが分かれば私たちは十字架の貧しさの中でも、前倒しで神に感謝と賛美が口に出来るのです。

“嫌なお人の親切よりも、好いたお方の無理がいい”

幸せのようなもので誘うサタンよりも、十字架の向こうから招いてくださるイエスに信仰者は惹かれます。癒されて一同をもてなしたペトロのしゅうとめは、神から救われた体験者が神の宣教者になることを示しているのです。ペトロがサタンから小麦のようにふるいにかけられ、イエスによって立ち直って教会の礎となったのも「救いの神」への愛でしたし、いわれの無い苦しみに打ちひしがれたヨブのひたむきさも「愛する神」への信仰からでした。この信仰がある限り、私たち信仰者はいかなる痛み、禍の中でも「救いの神」に「感謝と賛美」を忘れることはありません。